

道産豆類の需給と流通事情

ホクレン農業協同組合連合会 農産部 雑穀課

Ⅲ. 道産豆類の需給見込み

1. 雑 豆

(1) 小豆類

(単位：ha、俵、千俵)

年産	品 目	面 積	反 収	生産量	商品化 数 量	前年産 繰越量	供給量計	年 間 消費量	次 期 繰越量	在庫量
7	大 納 言	2,178	3.3	71.1	67.8	42.8	110.6	49.5	61.1	14.8 カ月
	小 豆	18,979	4.2	799.0	759.1	525.6	1,284.7	796.8	487.9	7.3 カ月
	小 豆 類	21,157	4.1	870.1	826.9	568.4	1,395.3	846.3	549.0	7.8 カ月
8	大 納 言	1,800	3.6	63.9	60.7	61.1	121.8	52.6	69.2	15.8 カ月
	小 豆	20,300	4.4	890.5	846.0	487.9	1,333.9	847.4	486.5	6.9 カ月
	小 豆 類	22,100	4.3	954.4	906.7	549.0	1,455.7	900.0	555.7	7.4 カ月

※7年産面積はホクレン推算値。

※8年産作付面積は作付指標値。反収は過去7中5値。

※反収・生産量・商品化数量・年間消費量はホクレン推算値。

ア. 小豆類の7年産作付状況については21,157ha（前年差+357ha）と増加し、収量は4.1俵/反と平年を下回る収量となった。

イ. 6年産は平年をやや上回る量を確保し、土産需要や大手メーカーにおいて堅調に販売が推移したことから前年から消費を増やした。

7年産年間消費量については846.3千俵と前年同数量とした場合、次期繰越量は7.8カ月分となる。

ウ. 消費の維持・増加には、北海道産小豆の安定供給体制が必要不可欠であることから令和8年産の生産にあたっては、作付指標面積への拡大が必要である。

エ. 今後については、指標面積への拡大とともに生産者から実需までを結び付けた契約栽培の拡充を行い、生産量・需要・価格の安定化を図っていく。

(2) いんげん類

(単位：ha、俵、千俵)

年産	品 目	面 積	反 収	生産量	商品化 数 量	前年産 繰越量	供給量計	年 間 消費量	次 期 繰越量	在庫量
7	大 手 亡	1,321	3.0	39.5	37.5	49.7	87.2	44.2	43.0	11.7 カ月
	赤系金時	3,528	3.0	104.9	99.6	110.5	210.1	115.8	94.3	9.8 カ月
8	大 手 亡	1,700	4.1	69.5	66.0	43.0	109.0	54.5	54.5	12.0 カ月
	赤系金時	4,500	3.1	138.3	131.4	94.3	225.7	115.8	109.9	11.7 カ月

※7年産面積はホクレン推算値。

※8年産作付面積は作付指標値。反収は過去7中5値。

※反収・生産量・商品化数量・年間消費量はホクレン推算値。

ア. 大手亡の7年産生産状況について、作付面積は1,321ha（前年差+21ha）と前年より増反したが収量は3.0俵／反と平年を大きく下回った。5年産以降、需給ひっ迫から、消費が減少しているため、8年産の面積拡大が必要である。

イ. 赤系金時の7年産生産状況について、作付面積は3,528ha（前年差▲118ha）と前年と比較して減少し、収量は3.0俵／反と平年並みであった。平年並みの収量確保には新品種である「秋晴れ」が大きく貢献しており、今後については「秋晴れ」による安定生産の確保を進めていく。

2. 大 豆

(1) 普通大豆

項目	年産	7年産		6年産実績		対 比	
	単位	全 国	うち北海道	全 国	うち北海道	全 国	うち北海道
作 付 面 積	(ha)	118,100	40,100	128,200	41,400	92%	97%
反 収	(kg)	194	309	173	306	112%	101%
生 産 量	(トﾝ)	229,400	124,100	222,300	126,700	103%	98%

※全国・北海道の面積・反収は系統見込。

ア. 7年産の全国の作柄は、作付面積が減少したものの北海道の収量が平年を上回る見込から229,400トンを見込む。

主産地北海道は、生育期間中の高温と干ばつが懸念されたものの、8月以降の降雨や中旬以降の夜温の低下などから、結果として順調な収穫期を迎えることができ、若干の小粒化傾向は見られるものの、平年反収を上回る309kg（前年比101%）を見込む。一方、面積が減少したことから生産量は124,100トン（前年比98%）を見込む。

イ. 輸入大豆については、滞っていた海上輸送事情が回復に向かったことで国内在庫が過多となっており、国産大豆の販売が後ずれする要因となった。

ウ. 円安傾向の継続により海外産と国産の価格差は縮小しており、また、北海道産大豆においては安定した生産量を確保していることから、需要の拡大に向け海外産から置き換えを進めている。

(2) 黒大豆

(単位：ha、俵、千俵)

年産	品目	面積	反 収	生産量	商品化 数 量	前年産 繰越量	供給量計	年 間 消費量	次 期 繰越量	在庫量
7	黒大豆	2,611	4.3	111.2	105.4	50.0	155.4	100.0	55.4	6.6 カ月
8		3,000	3.8	113.5	107.8	55.4	163.2	100.0	63.2	7.4 カ月

※7年産作付面積はホクレン推算値。

※8年産作付面積は作付指標値。反収は過去の反収の7中5値。

※反収・生産量・商品化数量・年間消費量はホクレン推算。

ア. 黒大豆の7年産生産状況について、面積は指標面積を下回る 2,611ha となり、収量は 4.3 俵 / 反と平年を上回った。

イ. 7年産は全道的に収穫期の降雨による品位不良が発生しており、実需者からは安定した品位での供給を求められており、需給環境から令和8年産の生産にあたっては、面積の拡大が必要である。